

キャンパスに「カレッジリンク型」老人ホームを

村田 裕之 ●村田アソシエイツ代表・(財)社会開発研究センター理事長室室長

一 「カレッジリンク型」老人ホームとは何か

米国の老人ホームは「リタイアメント・コミュニティ」と呼ばれ、一般に日本より規模が大きく、施設や運営スタイルも先進的である。その米国で、従来のイメージを大きく変える動きが起きている。それは、「カレッジリンク型」と呼ばれる大学と結びついた施設だ。その一つが、マサチューセッツ州ニュートン市にある「ラッセル・ビレッジ」。私立大学ラッセル・カレッジのキャンパス内にある。

「大学キャンパスにビレッジがあるという発想はとても魅力的。若い人たちが周りにいることが大切。ほとんどのリタイアメント・コミュニティは若い世代から隔離されている」と言うのは入居者のグロリア・トーマスさん（六十七歳）。入居者は、年四百五十時間以上のクラス参加が義務づけられている。この時間数は、ラッセル・カレッジの学生とほぼ同じ。つまり、六十五歳から九十五歳までの入居者は、大学生並みに勉強する必要がある。にもかかわらず、二〇〇〇年五月の

開設と同時に定員二百十人が満員となり、百二十人以上がいまも入居待ちという盛況ぶりだ。

入居者は、ビレッジ独自のクラスに加えて、大学で学生との共同クラスにも参加できる。一方、学生に対する相談役になることも多い。若い世代から刺激を受けながら、自分の人生経験が役立つのがうれしい。

一方、フロリダ州ゲインズビルの「オーク・ハンモック」は、隣接する州立のフロリダ大学と包括的な提携関係をもつ。米国の州立大学は、日本の国立大学にあたる。いわば国立大学初のカレッジリンク型である。魅力は、六百エーカー（約二百四十三万平方メートル）という巨大キャンパスに存在する、ありとあらゆる施設とサービスだ。

「このクラスは本当に幅が広く、刺激的です。文学、歴史、コンピュータ、哲学、法律学、毎日の生活など何でもあ。講師は大学の現役教授や退官教授のほか、われわれ入居者も講師役になるのです」

こう強調するのは、デイビッド・ランドル氏（六十五歳）。



ラッセル・ビレッジ中庭



学生との合同クラス(ラッセル・ビレッジ)



クラス風景(ラッセル・ビレッジ)



オーク・ハンモック正面外観



オーク・ハンモックのウェルネスセンター



入居者自身が自分の専門性や経験を生かせ、学生からも感謝される。また、全米最高水準の病院、医療センター、研究施設が建ち並ぶメデイカル・コンプレックスは、オーク・ハンモックの大きな目玉となっている。健康不安を抱える年長者にとって、いざという時に充実した医療・介護サービスが受けられるという安心感も大きな魅力となっている。

二 なぜいま、カレッジリンク型が増えているのか

まず需要側の理由は、人々の平均寿命が伸び、かつ、生活水準が上がったため、高齢の人でも知的刺激や社会的つながりを求める人が増えたことだ。

アメリカのリタイアメント・コミュニティで最も多い形態は、CCRC (Continued Care Retirement Community) と呼ばれるものだ。しかし、このCCRCは、もともとナーシング・ホーム(介護専用施設)から発展した「ケア・モデル」であり、長期的な介護の提供に主眼を置いている。このため、旧来型のCCRCは、人里離れた山間部や砂漠の真ん中など、にぎわいのある市街地から離れているものが多く、社会的な孤立感が強かった。

フランクリン・ルーズベルト大統領が社会保障法を成立させて、標準的な引退年齢を六十五歳に定めたとき、アメリカ人の平均寿命は六十三歳であった。しかし、現在の平均寿命

は七十六歳である。寿命の伸びに従い老後の時間が長くなった。これに伴い、施設の中で受動的な生活を送るより、もっと活動的で知的刺激の多いライフスタイルを求めるシニアが増えたのだ。

一方、供給側の理由は、アメリカのシニア向け住宅市場が頭打ちで、さらなる商品の差別化が必要なことだ。アメリカでは、特に一九九八〜一九九九年以降に多くの住宅が建設され、現在は供給過剰気味となっている。このような背景において、コミュニティ運営会社が、より高度化する入居者のニーズに応える方法が、大学との連携による「カレッジリンク型」なのである。

三 カレッジリンク型のメリットは何か

では、この「カレッジリンク型」リタイアメント・コミュニティには、入居者以外の関係者にとって、どのようなメリットがあるのだろうか。

(一) コミュニティ運営会社にとってのメリット

コミュニティ運営会社にとっての最大のメリットは、マーケティング効果である。大学との連携により、入居者は、通常のリタイアメント・コミュニティでは不可能な多様なサービスが受けられることをアピールできる。国土の広いアメリカでは、一部の大都市を除くと、住宅地と繁華街とが離れている場合が多い。そのような地域は、しばしば大学が活動資

源、人口集積の両面で街の中心となっている、いわゆる「カレッジ・タウン」となっていることが多い。

例えば、ニューヨーク州イサカは、人口わずか三万人の小さな街だが、コーネル大学、イサカ・カレッジの二つの大学関係者を合わせると八万人となる。アメリカでは、大学に近いということは、さまざまな利便性があることを意味する。

(二) 大学にとってのメリット

名門大学に隣接したコミュニティの入居者は、しばしば、その大学の卒業生あるいは元職員である場合が多い。この理由は、アメリカでは名門大学の関係者は、その地域に愛着をもっていること、子どもがその地域に住んでおり、同居はしないが、近くに住むことを望んで移り住む場合が多いことによる。これは、近年、日本の都市部で増えている親世帯と子世帯との近居に似ており、興味深い。

このようにして、出身大学のそばのコミュニティに入居する大学OBは、しばしば多額の寄附をしてくれる。これが大学にとっては大きなメリットとなる。大学から離れていたときはあまり寄附しなかった人も、すぐそばに引っ越し、頻繁に大学を利用するようになると、同窓生意識が一段と高まるためか寄附をしやすくなるようだ。また、最近、連邦政府が大学の老年学分野の研究を奨励し、多くの研究費をつけている。リタイアメント・コミュニティと連携している大学は、そのような研究費を得やすくなる。

(三) 大学教授・学生にとってのメリット

ニューヨーク州イサカにあるリタイアメント・コミュニティ、ロングビューでは、従来の「ケア・モデル」ではなく、「ソーシャル・モデル」という新しい考え方を提唱・実践している。ここでは、隣接するイサカ・カレッジの老年学研究所と包括的な提携関係を結び、大学教授がロングビューでクラスを開いたり、学生がロングビューのインスタンとして介助サービスを行ったり、パートタイムの運営スタッフとして活動したりしている。一方、ロングビューの入居者は、イサカ・カレッジの施設をフルに利用でき、クラスに参加して単位もとれる。また、学生向けの講師として参加したり、学生の相談役になったりすることもある。このように異なる世代間で互いに教え、教えられる学びあいの機会を得られることが、大学教授・学生のメリットである。

(四) 地域にとってのメリット

例えば、数十エーカーのリタイアメント・コミュニティを建設すると、数百億円規模の投資となる。これが、雇用の拡大や地域経済活性化への大きな起爆剤なる。

以上のとおり、大学とシニア住宅との連携は、関係の深さに差はあるものの、シニア住宅運営会社、入居者、大学、大學生・職員、地域、それぞれに対して多くの利益を生み出している。このような仕組みが、ビジネスとしてうまく回って

いる最大の理由は、これら関係者間において、相互にメリットのある「ウイン・ウイン関係」が成立しているからにほかならない。

逆に言えば、このような「ウイン・ウイン関係」をいかにバランスよく構築するかが勘どころである。

世界最大の高齢者NPO、AARPの二〇〇一年の調査でも、リタイアメント・コミュニティにおけるゴルフコースや温暖な気候は、もはや退職者にとって優先順位が低い。かわりに、よい隣人関係や知的刺激のある環境が優先順位の上位に挙げられている。このような近年のシニアの新しいニーズを先取りしたリタイアメント・コミュニティが、ここ数年いくつも出現している。

これらに共通するのは、入居者同士が共通の関心分野で意気投合しやすい環境や雰囲気があることだ。言い換えると、高い学習意欲をもち、自分と共通の知的好奇心をもつ人々とを結ぶ縁「知縁」を深める場となっている。そしてこれが、シニアにとって「ついのすみか」を選択する大きな理由になっていることが興味深い。

もう一つの共通点は、入居者の人たちが実際の年齢よりもはるかに若々しく、生き生きとしていることだ。例えば、ラッセル・ビレッジの入居者の平均年齢は八十三歳だが、要介護状態の人は二百十人中五人しかいない。通常、開所五年後の老人ホームでは、要介護者の割合は一〇%程度になるのに

比べ、驚くほど割合が低い。筆者が実際に会った人たちは、皆本当に活動的であり、実際の年齢より十歳から十五歳程度若々しく見えた。知的刺激の多い精神的に充実した生活を過ごすことで、高齢の人でも寝たきりにならず、生き生きと暮らせる。これこそがカレッジリンク型の最大のメリットである。

四 日本での実現のために何が必要か

このカレッジリンク型を日本で実現するには何が必要か。

第一に、ハコモノに代表される「ハード」ではない「ソフト」重視の姿勢。大学のそばに老人ホームというハコを造ればカレッジリンク型になるわけではない。学生との共同クラスや学生の相談役など、学生と入居者との双方にメリットのあるプログラムの企画と運営が重要だ。そのためには、ホーム運営者と大学という文化の異なる組織同士の相互理解が不可欠だ。

第二に、世代間のコミュニケーションにたけた調整役。米国の大学には、社会福祉分野に世代間教育に造詣の深い優れた教官が多い。異なる価値観をもつ、それぞれの世代の意見に耳を傾け、双方の懸け橋となれる人材が不可欠だ。

第三に、入居者のホーム運営への積極的関与。日本の有料老人ホームでは、入居者がサービスの一方的な享受者となっている場合が多い。これに対し、カレッジリンク型では、入居者がクラスの企画や運営に積極的に関与する姿勢が強い。入居者には「客」としてではなく、生活共同体づくりの「担

い手」としての意識が求められる。

五 日本の大学にとっての 新たな社会的役割と事業機会

日本の大学はいま、大きな岐路を迎えている。少子化で年々学生が減少し、質の高い学生の獲得競争は、年々激しくなっている。一方、独立行政法人化の動きで、市場原理を導入した合理的な経営を取り入れざるを得なくなっている。大学も差別化が必要な時代だ。

カレッジリンク型シニア住宅は、このような少子化、高齢化、大学経営の合理化という時代の流れに合致しており、多くの関係者に有形無形の利益を生み出すものである。これまで大学は長年、主に若年者の教育機関としての役割を担ってきた。だが、これからの高齢社会においては、新たな世代間教育の提供者としての役割も担う時代となる。それは、単に社会貢献的意義だけを錦の御旗にするのではなく、大学経営の新たな差別化戦略として実行するのが妥当だ。

そのためには、大学関係者に「経営者」としての感覚が強く求められるだろう。こういう話をすると、「日本の大学はアメリカとは違い、官僚主義が強く、そんなことは難しい」という人も多い。だが、日本に比べて相当開放的に見えるアメリカの大学でも、官僚主義は歴然と存在する。そもそも官僚主義は、大組織であればどんなところにも存在する普遍的

なものである。官僚主義のために新しいことができないという人は、自分自身が官僚主義に安住しているからにほかならないことは、黒澤明監督が五十年前以上に製作した映画「生きる」で語られているとおりでである。

日本でも退職後に大学の公開講座などに通う人が増えているし、大学院で自分の好きな勉強をしたいという人も少なくない。これからいわゆる「リタイアメント」の年齢に近づくと、高齡世代は、高齡になっても、リタイアせずに、これまでの高齡世代より、さらに知的に活動的になるだろう。

従来の、社会から孤立した「ケア・モデル」のコミュニティではなく、ロングビューが実践している、あらゆる世代との社会的交流を促す「ソーシヤル・モデル」のコミュニティづくりは、アメリカでも斬新な試みとして注目されている。将来の大統領候補と言われるヒラリー・クリントン上院議員も注目者の一人だ。

だが、アメリカに比べ、日本のほうが伝統的に世代間の交流には慣れている。日本で目指すべきは、アメリカの事例に学びつつ、日本独自の「ソーシヤル・モデル」をつくりあげることだ。

かつて老人ホームは、アメリカでは「陸の孤島」、日本では「姥捨て山」とやゆされた。カレッジリンク型は、「姥捨て山」を「知恵の泉」に変え、「老人ホーム」という名称すら、似つかわしくないものに変えていくだろう。